書評

『アジア「歌垣」論　附・中国雲南省白族の歌掛け資料』

岡部隆志著

真下　厚

本書は著者がおよそ二十年に及ぶ中国西南部少数民族歌文化調査をもとに、歌を歌うこと、歌を掛け合うことの意味、論理を追究した大きな稔りとなるものである。

岡部隆志氏は日本古代文学の研究者であるが、氏に先立って中国雲南省少数民族の歌文化調査・研究を切り拓いていた工藤隆氏とともに、一九九七年大理白族の調査に赴き、今日まで数多のフィールドワークを重ねてきた。こうした地域には古代日本の歌垣に類似する恋の歌掛けが今日も行われている。岡部氏の研究はその実態を明らかにすることにとどまるのではなく、その調査を通して知り得た、人々が歌を掛け合うことの諸現象に論理を発見することであった。そして、なぜ歌を歌うのか、なぜ歌を掛け合うのかを明らかにしようとする。本書はそうした考究の結晶である。

本書は、「Ⅰ章　アジアの歌掛け文化」「Ⅱ章　白族の歌掛け文化」「Ⅲ章　漢調の歌掛け」「Ⅳ章　白族の歌文化と『万葉集』」「Ⅴ章　問答論」「Ⅵ章　エピローグ」の六章と「資料編　中国雲南省白族の歌掛け資料」からなる。

資料編は、著者たちによって二〇〇〇年に大理白族自治州洱源県喬后観音廟で記録・翻訳された二時間四十七分にわたる歌掛け資料三〇〇首、著者の依頼によって二〇一五年（一三七頁に二〇〇六年のこととある。これが正しいか）に白族歌文化研究者で歌掛けの優れた歌い手でもあった施珍華氏が創作した「歌路」（歌掛けの流れ。定まった流れとして固定的に捉える見解と実態としては必ずしもこれに沿わないとみる見解との両方があり、本論で取り上げられる）のパターンに沿った男女双方の立場の歌一〇〇首、著者たちによって二〇一一年に大理白族自治州鶴慶県銀都水郷で記録・翻訳された漢調（漢語で歌う）での約五十分の歌掛け資料一二三首及び関連する二〇〇七年、二〇〇八年、二〇一〇年、二〇一二年の聞き書き資料からなる。

大理白族の「歌垣」資料としては工藤氏の報告した、一九九六年に剣川県石宝山歌会で行われた約六時間に及ぶ歌掛け資料八四八首など（同氏『雲南省ペー族歌垣と日本古代文学』勉誠出版、二〇〇六年）があるが、この岡部氏の喬后観音廟での歌掛け資料はこれに次ぐ時間の長さ、歌数のもので、白族の歌掛けがどのようなものかを知る貴重な資料の一つ。また、施氏の歌資料は歌掛けの場を離れて創作されたもの。優れた歌い手は歌の場を離れても歌を生み出すことができる。歌は歌掛けの場だけのものではない。白族語の音標文字、漢字当て字の記載されていることも資料として価値が高い。また、本編にもある歌い手からの聞き書きは歌い手と歌掛けの背景を知るための資料として貴重なもの。今の妻との結婚を決めた歌掛けで何を歌ったか、「歌い捨ててしまう」ので覚えていない（四九六頁）という答えは白族の歌掛けが「現在的」（一三三五頁）であることを表している。

さて、本論。こうした調査にもとづき論究されるが、論述の随所には珠玉の言葉がちりばめられている。

Ⅰ章の「アジア歌掛けの諸相」ではアジア各地の多様な歌掛け文化を「歌垣的歌掛け」と「非歌垣的歌掛け」とに分けて広く概観、そのいずれにも「協調（融和）」と「対立（闘争）」という働きがあるとし、自然や生業、宗教、生き方などを共有する人々の間で機能するとする。歌のみが取り出されて考察されるのではない。人々の営みとして立論されるところ、本書を貫く姿勢である。また、リス族の裁判での歌掛けが「歌という心地よい非日常性を共有する協調性」を前提に現実の争いを「歌の非日常性での競い合いに転換させることで」「ある限度を超えた深刻な対立を回避することを可能にする」（八頁）と述べるところに「歌を掛け合う」とは何かが示される。モソ人の歌喧嘩で殴り合いとなることについて、「そういうものだと思う。いつも融和されるほど世の中甘くはないということだ。」（九頁）とするところに、歌の機能と現実との関わりについて氏の考え方がうかがえよう。「音数律から見たアジアの歌文化」では歌の音数律の規則性（定型）は声による歌と文字による詩（漢詩や和歌）との両方にみられ、その働きの本質とは「言葉を彼岸の言葉へと飛躍させる力と、この世の規則的な言葉の秩序に従わせる力とのそのアンビィバレンツな働き」（三二頁）にあるとする。定型として五音・七音の音数律を持つアジアの歌が多いが成立の解明は現段階では困難で、まずはアジアの歌文化の多様性を認識するところから始めるべきだとする。

Ⅱ章はまず「白族の歌垣」で白族の「歌垣」について概説し、次いで洱源県此碧湖海灯会、同県喬后観音会での歌掛けを通して論じる。「ツービー湖畔の掛け合いにおける歌掛けの持続の論理」ではなぜ長時間の歌掛けが可能なのかを問う。「歌路」をめぐる著者の思考の流れはあたかも歌掛けのそれのように行きつ戻りつし、ここでは歌の上での恋愛は現実の恋愛に先行し、それを先行させる働きとして歌路があると結論づけ、その進行に抗する動きが掛け合いのエネルギーが生まれることにつながり持続を促すとする。「繞る歌垣」では、資料編の三〇〇首をもとに、長時間持続する歌掛けは協調と対立との混在する掛け合いが幾つかのパターンを繰り返しながら進み、歌い手の真剣さや歌の力の程度もその持続に関わるとする。著者の「歌垣」論の重要な柱である。本節では社会制度の変遷による白族の歌掛けの変質についての指摘も重要である。「施珍華に白族の歌垣について聞く」は白族「歌垣」についての施氏へのインタビューで、前二節の論を支えるもの。「アニミズム的修辞論」は歌の表現を論じる。白族の歌は景物を比喩として主想部へと展開する構造を持ち、比喩表現の比率は歌掛けの即興の歌では少ないが、歌の技に長けた歌い手の歌では高く、施氏の創作歌ではきわめて高いとする。このように白族の歌掛け資料同士を比較できるまでに研究が進められていることは感動的ではないか。比喩表現のわかりやすさという点も指摘、白族の歌掛けではそこに臨む相手の気持ちや態度を確かめるところに主たる関心があるとする。こうした自然の景物を比喩とする修辞は『詩経』『万葉集』にも見出され、氏は「アニミズム的修辞」と呼ぶ。古い詩の修辞

がなぜ白族の掛け合い歌のなかに生きているのかと問い、「掛け合い歌が盛んな白族の地域では、アニミズム的観念を抱えた共同性がまだ十分に機能していて、たとえ詩の中での自然の景物だとしても、歌い手が詩の修辞を意識したとき、その修辞（比喩表現）をアニミズム的修辞へと誘導する力になった」（一六七頁）とする。なお、『詩経』「興」については白川静氏『興の研究』（一九六〇年）が「興的発想は原始的な心性のうちに呪的発想として成立し」たと述べるところをも考え合わせたい。「山花碑」における音（声）と文字」は中国漢字文化周辺の文字を持たない文化における声（言葉）の文字化の具体的様相について、明代白族知識人による詩碑「山花碑」と白族民間芸人や歌手による語り芸記録「大本曲」「本子曲」を材料に論じる。「山花碑」には漢語由来の語を表す借字が多く、次いで音仮名、白語の意味を表す訓字が最も少ない。こうした白文表記は漢語に精通した白族知識人しか読めず、これは白族が厳密な意味を表す文字表記を必要としなかったからだという。とはいえ、これが表音記号的な性格をも持つことから定型音数律の歌表記を可能にした、とする。一方、音仮名中心の表記をとるのが「大本曲」「本子曲」で、このうち音仮名の割合の圧倒的に多いのは剣川地域で盛んな「本子曲」、これに比して訓字が多いのは洱海周辺で流通する「大本曲」とする。これは洱海周辺の歌い手たちが地域を越えて普及させたいという思いから意味の表される訓字を多く用いたという。表記の違いは地域の社会的文化的条件の違いと関わると論じる。この問題は声と文字との両方の世界にわたるもので従来あまり取り上げられなかったが、解明すべき重要なテーマである。本書では慎重かつ緻密に論じられており、研究の進展に大いに寄与しよう。

Ⅲ章の「異文化をつなぐ歌掛け」では、白族と漢族の両方が居住する大理白族自治州鶴慶県では「田**埂**調」と呼ばれるメロディの歌があり、漢語の方言で歌掛けが行われる。その漢語方言での歌掛け「漢調」の各省での広がりを確認し、「田**埂**調」の歌の音数律や押韻のゆるやかさ、先人の歌の蓄積を踏まえた修辞の技、比喩表現の多さを指摘する。この歌のゆるやかな様式が異文化をつなぐ働きをも持つと説き、生活レベルでの交流の必要性がこうした様式を生じさせ、歌掛けでの交流を可能にしたと論じる。著者の視点はここでも歌を掛け合う人々に据えられていることが知られよう。

Ⅳ章の「歌垣における歌とは何か」では、アジア各地の歌文化から文学表現の諸段階を見出すことで日本古代の歌文化の重層性に気づくことが可能になるとし、その比較の意義を説く。これは比較研究の方法を提言したものできわめて重要である。「対唱歌の力学」では、歌掛けにおける二方向の働きは万葉歌にもみられるが、歌掛けにおける持続への働きのような持続性は持たないという。氏は古橋信孝氏の論を援用して、万葉歌では心の一部を積極的に歌うことが歌の構成条件となり、短歌が「未完結なものとして自立した」（二三六頁）とする。「歌うことは（中略）その歌が完結してないことによって、歌われた歌の欠落を埋めていく次の歌を必要としてしまう。その次の歌は現実に歌われなくてもよい。歌い手の中で繰り返される沈黙の歌でも、あるいは聴き手の心の中で繰り返される歌でもよいの

だ。」（二三七頁）と述べ、これを『万葉集』における持続の論理とする。「境界の力学と歌の力学」は、彝族の葬儀の歌、台湾ヤミ族の歌、徳之島のサカ歌では境界において相反する力がせめぎ合うとし、これを「境界の力学」とする。歌はこうした力学を抱え込むが、それを超えて享楽性や遊戯性へと発展する可能性を本質的に抱えるとみる。「歌の掛け合いが持続していこうとするとき、境界の力学として機能した歌の力学は、言葉の呪術性から解き放たれて、対唱歌の力学として発展していく」（二四六～七頁）とする。信仰レベルでは言葉の掛け合いは持続しないが、歌掛けでは享楽性・遊戯性によって持続するというのである。

Ⅴ章は長編叙事の神話や物語が問答形式で歌われることについて折口信夫の問答論と対峙しつつ考察を深めてゆく。「問答論」では折口が着目した時制を手がかりに、神話的叙事に流れる「神話的時間」と問答の歌掛けの「現在的時間」との違いがあるという。彝族社会が宗教者の唱える長編叙事の神話と民間の歌い手が問答形式で歌うという、二つの「表現態」を持つのは呪術宗教的世界観を維持しつつその長編叙事を楽しむという社会性を持つことを示すとする。「水平としての問答論」は手塚恵子氏の論を踏まえ、歌掛けや芸能の問答は折口のいう垂直的なものでなく水平的であるとして、「神が語るという体裁をとることが多い長編叙事の表現形態（垂直的）の一部が水平的な問答態に変化することがあり得る」（二八五頁）と述べてその成立の道筋を示す。「「芸能と問答」論」では、歌い手と聴き手が現在的な時間を共有する問答という表現態は神事の後の宴にふさわしく、その場の現在を歌の遊びとして共時的に楽しむものとする。問答形式は「多様な場面で演じられる表現態であり、人々に広く共有されていること、そして、芸能化の機会を抱え込んだ表現態である」（三〇五頁）とまとめる。

Ⅵ章「エピローグ」では「水平性は、掛け合わされるその現在的時間の中で消費される言葉のやりとりであって、そのやりとり（問答）をいかに持続させるかに歌い手は夢中になり、予定された結末に向かう流れに乗っていたとしても、たいていはそれを裏切ってしまうやりとりである。」（三二五頁）として、本書の論をまとめる。そして、「掛け合いという表現態が本来持っている自由さとして考えたいというのが、わたしの「かけあひ」論すなわち「歌垣」論ということになる。」（三二六頁）とし、「歌の掛け合いの「つかずはなれずゆきつもどりつする遊動」は、私たちの生が織りなす特異な動態」なのだと締めくくっている。

さて、本書の論述を追うことにすっかり誌面を費やしてしまったが、氏の論と対峙して思い浮かんだことのいくつかを記しておこう。

恋の歌掛けにおける「協調」と「対立」という二つの働きは歌掛けの現場から見出されたもので、歌掛けをダイナミックなものとして捉える重要な見方として高く評価できよう。その上で、これは長編叙事の神話や物語の内容を掛け合いのかたちで歌う場合にはどのように働くのであろうか。換言すれば、この見方は歌掛けの全体に及ぶのか、及ばないのかということである。歌を掛け合うことはすでに協調的なことであ

り、叙事の内容は共有されているのであるから、ひたすらその流れに沿ってゆけばよいということか。そうだとすると、「対立」は限りなくゼロに近いということになる。とはいえ、聴き手は「問いと答えの当意即妙のやりとりに惹きつけられる」（二六八頁）とあるので、恋の歌掛けの場合とは異なるであろうが、やはり小さな「対立」のようなものはあるようにも思われる。

また、この問答において、長編叙事の神話などの歌掛けの場合と恋の歌掛けの場合とでは同じなのかどうか。つまり、神話の内容と流れが意識された歌掛けと歌路のようなものがほとんど意識されずに行われる歌掛けではどのように異なり、共通するものをどのように抽出することができるかということである。この内容・流れの意識される問答の場合、答えの自由度はどの程度なのか。興味は尽きない。

恋の歌掛けにおいて「ゆきつもどりつ」の掛け合いのなかで恋が成就する場合、その最終局面の歌掛けはどのように展開するのか。今では実見はかなわぬことであろうが、歌掛けへの思いは膨らむばかりである。

歌詞の伝承性ということも知りたいことである。恋の歌掛けに臨むには歌詞を一〇〇〇首覚えねば歌掛けができないとされるのであるから、それをそのまま、またはその一部を変えて歌うのであろう。これに対して、内容や流れが共有されている叙事の歌掛けではその歌詞はかなりの程度伝承されているということだろうか。もっとも、これは学界の今後の調査・研究によって明らかにされてゆくべきことであろう。

さて、こうした歌掛けの歌と万葉歌の問題である。著者が本書で比較の対象とするのは白族の歌会での歌掛けの歌であり、「歌い捨ててしまう」ものであって、万葉歌との距たりは大きい。しかし、こうした歌でも記憶に残るものもある。納西族の歌手は五十年ほど前の男女一組の掛け合いの歌を覚えているという（一九三頁）。また、施氏は手紙で相手の女性と歌を贈答していたという（一〇六頁）。このことは歌掛けの流れから歌が独立して一首の歌になったことではないか。施氏は歌掛けの場から離れて歌を創作し、女性の立場の歌をも作っている（歌詞のなかに「兄（原語 gouxˇ）」などを詠み込む歌が散見される。三九三頁など）。これは空間・時間・性別の制約から自由になり、自在に歌が創作できるということではないか。それは研究者のような知識人だから可能なのだろうか。実は評者が調査する湖南省鳳凰県苗族の歌文化にも同様なことがみられる。この地域では恋の歌掛けで一度に交わされる歌数は多くなく事情は同じではないが、四、五十年前に交わし合った一組の歌を覚えている夫妻には何組も出会っている。また、施氏ほどの知識人ではない歌師（歌の専門家）たちが歌を書いてしばしば贈り合ってもいる。歌師は村の男女の若者から頼まれて、それぞれの立場の掛け合いの歌を予め作ってやりもする。こうした歌のあり方を考慮に入れるならば、いま少し万葉歌に近づくことができるのではないか。そのとき、氏のいう「短歌の自立」への道筋はどのように描かれるのか。この点について、論のさらなる展開を期待したい。

二〇一八年　三弥井書店刊　本体九〇〇〇円

（ましも・あつし）